中　央　高　等　学　校　校　長　室　だ　よ　り　＜５＞

つれづれなるままに　第５号

平成30年７月18日（水）発行

校長　深谷　浩一

中央は本当に圧勝したのか？

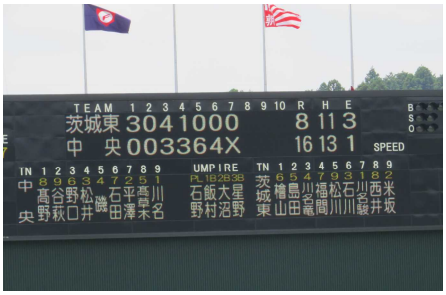
～「敵は己の油断なり」～

水戸桜ノ牧を破って２回戦に進出した本校野球部の次なる相手は，お隣の茨城東高でした。この試合は，７月14日（土）に行われたため，「週休日の試合は自由応援」のルールに従って，応援部以外の生徒は希望者のみ「10時試合開始」に間に合うように笠間市民球場に集合したのでした。午前９時半の時点ですでに気温は34度を超え，熱中症で倒れる生徒が出ないか，引率の先生方が心配するなか，試合は茨城東の先攻で始まりました。

さて，試合の様子についてお話しする前に，この試合を観戦しないで，「中央16点大勝」（７月15日付け茨城新聞朝刊の見出し）や「中央，７点差覆す猛攻」（７月15日付け朝日新聞朝刊の見出し）などという翌日の新聞を見た人は，本校が危なげなく圧勝したようなイメージをもったと思いますが，実際に球場で応援していた人は，果たしてどう思ったでしょうか。もしかしたら，本校がコールド負けするのではないかと心配した人もたくさんいたのではないかと思います。少なくとも私はそれを恐れていました。というのも，３回の表までに７点を先制されてしまい，本校の攻撃は，２回までは三者凡退で簡単に打ち取られていたからです。

この試合の前評判は，圧倒的に本校が有利だと新聞には書かれていました。だから，この試合の前から，先生方や生徒の中には，３回戦の方に頭が向いてしまった人もいたようです。選手諸君にはそんな油断はなかったと思いますが，少なくとも私自身は，やる前から勝ったようなつもりになってしまいました。どんな相手に対しても油断しないで，全力でぶつかるんだぞと生徒には話しておきながら，実は油断してしまったのは私自身だったのです。

この試合は，茨城東のピッチャーで４番の大川潤也君の１回先制の３ランホームランで始まり，３回にも４点を追加されて，圧倒的な茨城東ペースで試合が進んだのです。



しかし，本校はここで踏み止まり，３回の裏以降は選手も落ち着きを取り戻しました。そして，制球力が落ちた大川君を攻め立て，７回までに16点という大量得点でコールドゲームとなったのです。勝利したことはうれしかったものの，大川君に対しては完敗だったと言わざるを得ません。もしも，茨城東のチームも本校と同じ20名の選手がベンチに入っていたら，また，大川君と交替できるピッチャーがひとりでもいたら本校は負けていたかも知れません。

どんな状況でも油断してはならない，敵を甘く見てはいけないー。この試合は大事なことを教えてくれたような気がします。「敵は己の油断なり」なのかも知れませんね。この教訓を次の試合に生かしてもらえればと切に願っています。（つづく）